會報

昭和七年十月　19　日本山岳會

閑窓記

伊藤秀五郎

雨の風景

恐らく日本の風景ほど、少くとも中部日本の風景ほど、四季の雨に適した風景はないであらう。春雨・夕立・時雨・氷雨、何れも趣きある風情である。殊に五月と十月の、もの靜かな、柔かい、そしてまた優美でさへもある内地の雨は、ひとしほ好ましく思はれる。北歐の霧と日本の雨は、それらの自然のみならず、時にしば〳〵それぞれの文化に於ける北歐的なもの及び日本的なものをさへ象徴してゐる。浮世繪師廣重が、如何に優れた風景畫家であつたかは彼の多くの作品に見られる雨の描寫に於て最も端的に知り得られると同時に、少くとも中部日本に於ける雨が、如何にその風景構成の上に重要なる要素をなしてゐるかを明瞭に示すものである。より北方的な北海道、及びより南方的な臺灣の雨に、何れも廣重の優美を見出すことの出來ないのは極めてしぜんのことである。

マリア・シヤプドレーヌ

ルイ・エモンのマリア・シヤプドレーヌの邦譯を、旅先のつれづれに讀みかけたが、その優れた自然描寫に少なからぬ興味を牽かれて、一氣呵成に讀み了つた。譯文の流暢もさることながら、原文の美しさが思ひやられた。カナダの自然と、それと人間との交渉とが、一人の乙女マリアの生活を中心として、實に巧に描き出されてゐる。現代日本の淺薄な都會文化に、何らの反省もなく陶醉してゐる多くの青年子女には、一顧の値すら認められない作品かと思はれるが、少くとも「ハイランド」のシベリアの風景を讃美した一節に同感を禁じ得なかつた讀者にとつては、一讀悔なきことを信じて疑はない。當代我國の作家に、一人のルイ・エモンの存在しないのは、その原因の何れを問はず、淋しいことであると思ふ。

マウント・エヴエレスト

登山に於けるパーティとリーダーシップの問題は、登山が大規模になればなる程重要さを增すことはいふ迄もないが、これは登山にのみ限られた問題ではなく、外國の科學的探險隊のリーダーなども、隊の統一と氣分の融和に就いては一方ならぬ苦心を拂つてゐるといふことである。ヤングハズバンドの名著 The Epic of Mount Everest を讀むものは、第二回及第三回エヴエレスト探險のリーダーであつたジエネラル・ブルースが、如何にその任に相應しい才能の所有者であるかを如實に知り得るのであるが、そのブルースに惠まれた才能といふものは、實に十六世紀以來代々彼の家系に傳へられた遺傳的能力であることを、英國の史家ガン氏が、その著Studies in Hereditary Ability の一章に述べてゐるのである。私は數年前札幌の丸善の貧弱な書棚の中に見出されたこの著書の中の一章の「マウント・エヴエレスト」といふ標題に少からぬ興味をひかれた。山登りと直接關係のないこの話もその興味から書いてみたのである。日本人ならば、さしずめ「リーダーシップに就いて」とか何とかしかつめらしい題を與へるところだが、かういふ研究的著書に於ても、尙且つマウント・エヴエレストといふ樣な章題をつけて、私の如き門外漢にも一本を勝はせるあたり、如何にも英國人らしいと感じたのであつた。

峠越

峠に關しては、大島君の名作をはじめ、最近の「山岳」誌上にも、小島細野兩氏の興味ある研究考證が載つてゐるが、坪井九馬三博士の「歷史地理學」の『峠越』の項には次の如く說明されてゐる。「峠越といふのは甲のくぼみから乙のくぼみへ出るときに、その間の高みを乘越える爲にこしらへてある、聯絡の道筋のことであつて、我邦に於て用ひる意味では、山一つ越す場合には之を峠といひ、幾つかの山を續いて越す場合には之を越といふ。依て此二つの性質のものを、合せて峠越といふ。右の坪井博士の著述は、かなり舊いものであるが、歷史地理學の入門書としては好著であるから、一寸思ひ出したままに書き拔いてみた。

寫生の時

「新しく得た印象を書き記すには、早過ぎても遲過ぎても面白くない。見聞くあとから、すぐ書かうとすると、雜多な印象が、目まぐるしく飛び出して來て筆寫を迫るので、その結果は、作に選擇と餘意と落ちつきと締りとが乏しくなる。また時期を過ごして書くと、印象が不正確になり、稀薄になり、又作者の主觀がほしいままに飛び出す結果、自然に拵へ事の差出口が多くなる。恰好の時機は、小事の印象が時の篩にかけられて、重要なる印象のみが著しく殘つた時而して殘つた重要なる印象が時にぼかされて稀薄にならぬ中の、中間期にある。」といふことを、デクインシイか書いてゐるさうである。まことに至言であると思はれるが、生來惡文の私なども、右の如き心懸で修練を積んだら或は將來一かどの文章を書き得る樣になれるかもしれない。それにしても、明治以來我國の山岳人にして、よくシユスター、ヤングの壘を摩する名文家果して幾人あるかを顧るとき、作文の難きを思ふと同時に、また一面自ら慰められるものがある。

（七、十、二）

會務報告

役員總會

拾月六日　赤坂溜池三會堂に於て

出席　小島　高野　武田　三枝　木暮　冠　槇　鳥山　高頭　松本　神谷　伊藤　角田　茨木　松方　田中

委任　中村　田部　藤島　加納　中原　渡邊　近藤　山川　津田　浦松

議題

一、理事改選之件、明年度退任せらるべき理事並に役員會推薦の新理事決定。

一、財團法人之件。

評議員會

拾月六日　赤坂溜池三會堂に於て、

出席　小島　高野　高頭　武田　三枝　木暮　冠

議題

一、評議員推薦之件

滿場一致を以て鳥山理事を評議員に推薦。

拾月理事會

拾月六日　赤坂溜池三會堂に於て、

出席者　役員總會之通り、

一、伊藤理事關西出張報告、

關西理事改選並に山小屋の件に付關西へ出張せし伊藤理事より詳細報告ありたり。

一、「山岳」第二十七年三號に關する報告

第三號は大體來る拾壹月下旬に發行し得る見込なり。

一、有志晩餐會之件、

大體十月下旬開催の豫定、詳細は追て發表。

一、山小屋之件、

角田理事十月中旬建築技師同行現地調査に赴く筈。

一、會費徴集之件、

來年度より集金郵便制を採用することに決定。

一、年次大會之件、

十一月理事會附議。

第五拾六回小集會

九月二十八日「木曜」午後六時半より赤坂三會堂階上にて茨木氏司會の下に開催され講演者は左に

「山と星の話」　野尻抱影氏

「山の繪を描くに就て」　茨木猪之吉氏

最初に茨木氏の過去二十數年來に亘る登山と、製作の經驗に始まり、日本の山水美を推奬し、大いに若い山岳畫家の進出を希望され、短時間に話され、引つゞいて野尻氏を紹介された。同氏は曾て山梨縣甲府市中學校に教鞭をとられ、傍々しば〳〵南アルプス地方に登山し、研究深く「山岳」紙上に發表された事もある。最近では主として星座の研究に從事せられ、山の星に就て各紀行文中より引用され、極めて趣味的に話され有益であつた。當夜は雨天にも拘はらず熱心なる來會者四十五名に及び秋の夜長を靜かに語り過ごした事は喜ばしい次第であつた。

會員計報

昭和七年五月二十六日逝去

（一二七）　靜岡縣武田千代三郎氏

同　八月九日逝去

（九〇五）　横濱市　Stürcke氏

同　八月三十日逝去

（四一三）　神戸市毛馬新次郎氏

本會は右三氏に對し玆に謹而哀悼の意を表す。

圖書基金申込會員氏名

本誌第十八號に報告したる以後の申込者左の通りである。

臺灣、伊藤彦一、（一口）

前回發表の分を加算すれば現在三十八名、四十八口である。

新着圖書

町田立穂譯　登山の指導と監督　J・C・C

坂部護郎著　單獨登攀者　同

大中德三郎著　富士行者身祿の傳說　著者

角倉太郎踏査　比良登山圖　日本アルカウ會

旅衣　第二輯　山の旅會

山岳資料　第十輯　關東山岳會

黑木立　第七八、七九號　關東岳愛會

山小屋　九月號　朋文堂

ハイキング　九、十月號　ハイキング社

ツーリスト　九月號　ジャパン・ツーリスト・ビューロー

登山嚢　京都醫大旅行部

山旅　第三號　同

第二四回大橋圖書館年報

井戸、中川兩君の遭難事情　大阪工大山岳部
殖民地ニ於ケル體育運動團體ニ關スル報告（昭和七年）文部省體育課
新東京市域圖五萬分一　陸地測量部
飛驒史壇　第一卷、二—五號　飛驒史談會
朽　網　九月號　朽網山岳會
山　彦　九、十月號　東京山彦山岳會
岳　友　八、九月號　日本岳友會
山　幸　第十三號　阪神山岳會
旅　行　九、十月號　東京旅行クラブ
ベルグ　九、十月號　岡山山岳會
管見錄　八、九月號　大阪管見社
山と溪　九、十月號　山と溪の會
山行案内　九、十月號　昭和マウントクラブ
山　九、十月號　横濱山岳會
旅　第七號　東京曉山岳會
旅　九、十月號東京アルカウ會
しらかんば　第一—三號　都島工業山岳會
TAC彙報　第三　戸畑山岳會
ペデスツリヤン九月號　關西徒歩會
アルカウ趣味九、十月號　日本アルカウ會
東京市山岳部パンフレット　第三　東京市役所體育會山岳部
臺灣山岳彙報　九月號　臺灣山岳會
RSC部報　九月號　リユックサツク、クラブ
白樺山岳會々報　第四號
東京登歩溪流會々報　第十號
日本登高會々報　第十二、第十三號
廣島山岳會々報　九、十月號
東京みなかみ會々報　第六一號
明峰山岳會月報　九、十月號
神戸アユモ會々報　十月號
神戸ヒヨコ登山會々報　九月號
山の巡禮　第一號　關東岳愛會
TBKR・NEWS　第九號　東京登歩溪流會
京都及大阪近傍圖十萬分ノ一六色刷　陸地測量部
The Geographical Journal Vol. LXXX No.2 Aug. 1932
Club Alpino Italiano Rivista Mensile Vol. LI No. 6 Luglio 1932
〃 〃 〃 7 〃 〃
〃 〃 〃 8 〃 〃
Butlleti del Centre Excursionista de Catalunya C. A. C. Any XLII Num. 445 Juliol 1932
〃 〃 〃 446 〃 〃
Die Alpen Les Alpes, Le Alpi VIII No.7 Juli 1932
Bulletin du Club Alpin Belge Tome IX No. 26-27 Mars - Juin 1932
The Mountaineer Vol. XXIV No.10 Sept. 1932
Butlleti Del Centre Excursionista De La Comarca De Bages Any XXVIII NO.155 Juliol 1932
Butlleti Del Centre Excursionista Aliga Any II Num.5 Maig - Juny 1932
The Prairie Club Bulletin No 218 Sept. 1932
Sierra Club Bulletin Vol XVII No. 4 1932
Trail and Timberline C. M. C. No. 167 Sept. 1932

會員寄贈圖書

藤木九三著　岩登り術
矢澤、河野共著　日本アルプス登山案内　以上　松方三郎氏
岳　第一號　同　中原繁之助氏
志村烏嶺著　山岳美觀　第一、二輯
松本吐芳、杉村楚人冠著　溫泉嶽を繞りて
岩澤正作著　赤城山から庚申山
大阪朝日新聞社編　山の傳說と情話　以上　田中正男氏
農商務省山林局編　登山の心得
自然子著　山嶽生活
想田秋曉編　高　岳　以上　清水忠雄氏

購入圖書

大町桂月著　富士行（大、八、七）
武藏野、多摩横山號（昭、二、四）
井　華　二一六（山の號）
山　旅　第一（京都醫大山岳部報告）
白　樺　第三、四、（白樺旅行會）
山の旅　第一、（東京登山倶樂部）
旅　想　第三（共旅會）
山のぼり第二、三、四（アマチュア山岳會）
岡一男氏追憶、母故々路（昭、六、一〇）
中野克明氏追憶　追憶（昭六、一〇）
向島豊之助編　飛驒探勝（大九、二）
大陽記念增刊　日本山水大觀（大、一二、六）
早稻田文學　秩父號（明、三九、八）
史蹟名勝天然記念物調査報告　立山と黒部峽谷（昭、五、五）
野村實氏追憶、南アルプスの雪に消えし實（昭、五、一）
小島烏水著　木蘭舟（明、三九、四）
蘆島廣滿著　富嶽紀行（明、二二、七）
中村秋季著　ホイットネ征服記（昭、六、九

特製繪葉書頒賣のお知らせ

先般「山岳」第二十七年一號の扉繪（石崎光瑤氏筆・きぬがさ草）を繪葉書に作らせ、會員諸君のため實費で頒賣したところ、非常に好評を得たので、今回更に第二十七年二號の扉繪（同氏筆・千島ざきやう）も前回同樣、高見澤木版製作所で別漉日本紙の繪葉書に作らせ、一枚五錢で頒賣することにしました。印刷枚數に限りがありますから、可成早く御申込下さい。

圖書紹介

近畿の山と谷

（住友山岳會著）三六版三八八頁　朋文堂發行定價一圓二十錢

近畿の山の案内書としては、今まで纏つたものは一つも出版されてゐない。當然出づべくして出なかつた本である。近畿と言つても何しろ隨分廣般に渉る事ではあり、案内書として、かなりなものを出すには、永い年月と多人數を必要とする。關西山岳界に於ける永い歷史と、彪大な會員を持つ住友山岳會にして始めて出來た仕事であらう。

範圍は東に鈴鹿、北は比良山系、南は大峰、大臺ヶ原、西は因但國境附近から伯耆大山に及んでゐる。

その内最もこの書に於て見るべきものは鈴鹿山系であらう。關西に於ける秩父とでも言へ樣鈴鹿は、阪神方面から幾分足場が遠い爲、まだ入る人も多くない。此の方面に詳しい住友の人達が、特に此處に力を入れて世に紹介したのは、行詰りかけてゐる關西の山の爲に喜ばしい。

大峰方面又は因但國境方面はやゝ簡略に過ぎる感があるが、何れ將來增補される事だらう。

兎に角關西の山案内書として近頃の好著である。（津田周二）

陸地測量部新刊地圖目錄

五萬分一地形圖　修正

高　山　十五號　飛田古月一面
富　山　十四號　小口瀨戸一面
同　十五號　虹　島一面
宇都宮　一號　宇都宮一面
同　七號　古河一面
同　十一號　深谷一面

同　十五號　高崎　一面
甲府　二號　丹波　一面
長野　三號　富岡　一面
木本　十三號　木本　一面
宇治山田　十四號　高見山　一面
和歌山　一號　櫻井　一面
以上拾貳面。九月三十日出版

山の消息

白山の旅（其一）

故郷の名山、白山を目指し、去る七月三十日夜行にて上野發、翌日越中城端に下車陽盛りに小瀬峠を踰え庄川に下り山旅の第一日を醇朴な西赤尾の宿に明かし、翌朝美しい庄川の風景を賞しつゝ飛騨白川村に入り荻町に泊る。第三日早曉出發、印象的な幾つかの村落を過ぎ、遙かに豪壯なる三方崩山を仰ぎ、森林美と渓流美の佳境、大白川を遡行すること三里にして彼の有名なる白水瀧に驚異の眼をみはり、白水温泉に草鞋を脱ぎしは午後五時、大白川の激湍の傍に、滾々と湧出する温泉に一浴せし氣持、實に筆紙につくし難し。

白山の旅（其二）

うと〳〵とまどろみしも束の間、午後十一時温泉を後に、愈々白山を目指して登行を開始す。軈てカンクラ谷の雪渓を登り了る頃ほのぼのと明け渡り一面のお花畑にはチングルマ、ナンキンコザクラ、アオノツガザクラ等の群落が實に目も醒めるばかりなり。六時頃室堂につき、一服後最高峰御前峰に登りしも、雲霧の去來激しく、わづかに霧のはれ間より北アルプスを望見せしのみ。同夜は石室に物凄い風雨の叫びをきゝつゝ夜を明かし、再び御前峰に登りしも、依然として風はやまず霧は深く、瞬間的に劍ノ峰、大汝、翠ヶ池は洵に神秘的な池なり。室にかへり荷を纏め、白山温泉に降り、五日間に亘る旅を終る。

八月四日白山温泉にて安田登茂次

鹿島川より冷池に到る新道

今夏後立山冷池小舍附近から、爺岳の一尾根を傳つて、大冷澤二俣に下る新道が出來ましたから簡單に御通知致します。

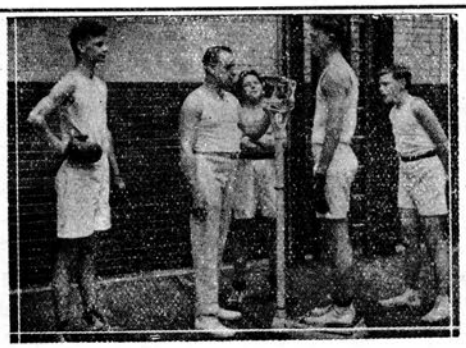
冷池小舍から冷乘越に下り、赭ガレの頭を越して稍上ると、左に中岩の谷の上手に徑を見出す。少し下れば尾根につき、草斜面や笹斜面を下る、樹林は丈低く疎らだから、鹿島鎗及東尾根の南面や北又谷はよく見える。尾根は大體緩やかに東に下るも、時々急に下降す。徑は時折西澤側に出で、爺岳東面も仰望し得る。下り一時間許りで深い樹林に入る。大冷澤の白い河原を、樹梢越しに俯瞰する頃より傾斜は一段急になり、尾根の突端のすぐ手前で西澤に下る一丁許りにして二俣の出合につき、獨木橋で左岸に渡る。此處まで冷池小舍より約二時間四十分を要し、水場は無く、指導標は未だありませんでした。

吹原不二雄

九州ところ〴〵

旅先にて一筆啓上仕候。七月二十三日より九州に參り候。何といふこともなき漫然たる旅に候も、小生九州は新參なればところ〴〵見物いたし居候。山も二三登り候へども、遺憾ながら別段のこと無之候。松方兄の「アルプスところ〴〵」は名文なれども、九州の山は小に過ぎて到底文章にはならざる樣に被存候。否、小さきは獨り九州の山に限りたることにはあらじ、最早今日となりては、總じて日本の山岳さへそのことに御座候。小生敢て奇を好みて壯語する譯にはあらず、且つはまた日本の山のものよさも多少は心得居る心組に候へども、如何せん、富士と日本アルプスは烏水先生、その他の山は亡友大島、平地は文豪花袋（尤も花袋の紀行すべて秀作とは限らず候も）にて殆ど書き盡し居候事、遺憾ながら疑ふ餘地なき事實に候へば、後進小生ら書生どもの作する文章、文章にさへならざるは、筆に非ず人にあらず、既に書くところ無き山を書く故と、自らは慰め候がいささか悲慘のことに思召候はずや。邦國縱に山多くして而も山無きの感あるは、當に然るべきことと被存候。御意見如何に候や。僕をして假りに一年の歳月をヒマラヤ山中に過さしめなば、當代無二とは言はざるも、必ずや秀逸の作文をなす算用ありと、去る日戯れに友に語りしことに御座候。笑止。

閑話休題。最初九州暑中の暑さには、いささか閉口致候も、數日にして馴應いたし候後は、さして苦痛とも覺え申さず候。唯風景の内地と餘り變化なきを、何かなく物足らぬ心地にて眺め居候。その點、天草は多少面白かるべしと豫想いたし候も、鹿兒島、宮崎などは聞きたる程のことも無之樣に感じ申候。異るは唯言葉のみにて候ひき。熊本など平凡なる田舍の一小都市、見るべきところも御座無く候。一つ熊本城址ばかりは、築城の妙さすが清正公なりと、感服いたし候ことに御座候。人吉より球摩川下りも試み候ひしが、三急流とは申せ、その趣、むしろ保津川に比すべく、天龍富士の二流には較ぶべくもあらざるは、已に蘇峰翁も銘記さるところ、但し涼味と鮎味とは滿喫致し候、阿蘇は昨秋大演習行幸の砌、道路擴張したる由にて、現噴火口は十町の近くまで自動車を通じ、熊本よりは僅か二時間にて達し候。火山學的には興味多きこと必然なれども、敢へて登山といふほどのこともなき山に候。唯、放牧場たる途中は草原の美しき處に御座候。霧島山もよき登山道あれば、靴なども普通のものにても差支無之、小生も



美滿津の「ホームトレーニング」用具！

型錄進呈

台名會社
美滿津
本郷・赤門前

電話
（小石川）845・2071

カンカン帽子に借物の卷脚絆にて、多數の登山者に互して登り候。この山南九州の高山なれば、頂上はさすが涼風に汗を止め候も、月並の山容採るにも足らず、小生この一山にて忽ち九州の山岳を了解致候まま、他の山々に登りたき希望は起らずなり申候。ただ、門鐵の「名所案内」に九州の溫泉中眺望隨一と推奬せる山腹の霧島溫泉は、湯も豊富、暑熱も知らず、加ふるに良き俯角もて鹿兒島灣を望む展望は格別にて、小生多く他を知らざれば隨一か否かは暫くおくも、確かに、樹木壯麗なる山中の格恰なる溫泉にて候ひき。

豊富なる史蹟には關心をもたざる此度の如き普通の旅行眼を以てすれは、概して九州の風物は平凡の一語に盡くべしと被感候事に御座候。雲仙、長崎、天草も廻りたく存居候もこの方は未だ確定仕らず候。とにかく八月十日迄には歸京致すべく、書餘は何れ拜眉の節に讓り候。熊本近在なる武藏居士の墓を訪ひたる折の駄句、お笑草に書信の結尾と代へ申候。草々頓首

青草を燒くや木立の太刀の塚

八月三日熊本にて　伊藤秀五郎

會津朝日岳の遭難考

八月下旬、理化學研究所員町田敏男氏は會津朝日岳にて行方不明を傳へられ、其後捜索の結果、九月二日銀山平須原口下流約二里の地點にて溺死體發見せられたり。氏の行程は朝日岳、丸山嶽を縱走袖澤支流北澤を下りて、只見川本流の徒涉にて、流されたるものと推測さる。詳細は近く山岳に發表の豫定。

角田　吉夫

雨の日光より

九月二十三日自動車とケーブルにて中禪寺雨の湖上を千手ケ原西ノ湖に向ふ。それより外山澤小田代原の森林を經て龍頭瀧附近の宿に泊。二十四日曇り、戰場ヶ原を三本松より御澤に入り太郎山に登る霧の爲眺望不可降つて志津小屋に着。二十五日久々で快晴大眞名子、小眞名子、富士見峠にて畫飯奈釋山、女峰山に登る充分な眺望を得下山の途中猛烈なる雷雨に遭ひづぶぬれにて夜十一時頃無事日光町梅屋敷に着二十六日快晴東照宮二荒神社を參拜夕方歸京。

茨木猪之吉

御通知

住所變更通知

大東京市域改正に就て、從來の市外の大部分は東京市に編入せられたり、右に依る會員の住所變更は、會員名簿作成に際しても必要有之、至急必ず御通知あり度し。

小集會開催通知其他に就て

從來小集會其他の會員に對する通知は其都度郵便を以て報告せしも、會報發行後は、可成會報を以て之に當れり、未だ此主旨會員全般に徹底せざる憾あり、自今、諸通知は會報に依る方針なり。

美津濃のスキー・靴・豫約開始

スキーの御用意のシーズンです。スキー・スキー靴は御使用前の完全なる御手入が肝要です。故に御準備は一時も早くなさる事を御奬め致します。**十月十五日**より新製の下記ヒツコリースキー及びスキー靴の豫約を致します。共に御希望通り御製作申上ます。

ヒツコリスキー		¥ 20.00		
スキー靴	SS	¥ 19.00	SA	¥ 13.00
	SB	¥ 16.00	SK	¥ 10.00

大阪　淀屋橋
東京　小川町
神戸　元町通

美津濃

名古屋　大須門前
京都　四條通
大阪南　日本橋

登山團體調査（追加其一）

「山日記一九三二年版」發行後に調査したる登山團體左記の通り

東鐵スキー山岳部 a麴町區丸ノ内東京鐵道局 b同局運輸課旅客掛長 c一九三二 d一三三名 e年一回

遞信山岳會 a東京遞信省内 b平井出貞三 c一九二九 d一九二五名 e會報年二回

東京山岳聯盟 a東京本郷六丁目十四 b中村孝藏 c一九三二

加盟團體左記の通（合計五〇〇名

關東アルペンスキークラブ
山の旅會
ヤマト山岳會
山人クラブ
テクロー山岳會
武藏山岳會
城南旅行登山會
東京山彦山岳會
東京山嶽會
東京登山會
e月報「報告」及「年報」

山旅會 a東京市芝區高輪南町三〇澤智子方 b同上 c一九三一、d十五名 e山旅毎月一回

在溪流會 a東京市日本橋區濱町一丁目二 b菅沼志朗 c一九三一 d二三名 e讃岳年二回

宇都宮高等農林學校山岳部 a同校内 b鈴木秀雄 c一九三〇年 d三〇名 e校友會時報

下野山岳會 a栃木縣廳内 b知事 c一九二七年 d一五〇名 e下野山林會報

阪神山岳會 a大阪市北區東梅田町 b米澤牛歩 c一九三〇 d四〇 e山幸年一二回

ベルグ・クレッテル・フェライン a神戸市 b須々木勝年 c一九二七年 d二二名

雄鳳會 a山梨縣北巨摩郡穴山町 b島津壽隆 c一九二七 d一五〇名 e日本南アルプス

都島工業學校々友會山岳部 a大阪市北區善源寺町三丁目 b三浦秀一郎 c一九二六 d五〇 eアンザイレン年三回

第一銀行スキー部 a京郡市烏丸三條角同行内 b高林宗一 c一九三〇 d三五名 EDSC

長岡高等工業學校山岳部 a同校内 b日下部富藏 c一九二九 d三五名 e年一回

鳥取山の會 a鳥取市西町 b同市上魚町吉村秀治 c一九二九年 d一三八名

熱田スキー倶樂部山岳部 a同市南區熱田木之免町 b鬼頭六一郎 c一九三〇 d二〇名

名古屋醫科大學山岳部 a名古屋市同大學内 b未定 c一九三〇 d二〇名

菫臺山岳會 a金澤市 b辰巳陽一 c一九二九 d三一名 e年一回

金澤商業學校山岳部 a金澤市 a藤垣佶 c一九二二 d五〇名 e校友會誌年一回

三重縣立松阪商業學校山岳部 a同縣松阪町 b村井精一 c一九三二 d九〇名

編輯後記

豫て營林署に出願中であつた穂高唐澤に建設せらるゝ本會山小屋の敷地が、漸く本月七日附で許可が下りたことは、洵に御目出度いことで御同慶に堪えない。

之で愈々本式に計畫を進めてゆかれる譯で、右に就て非常に骨を折つて來られた、山小屋委員の方々に厚く感謝するとともに會員諸君の御後援を切に希望して已まぬ次第である

昭和七年十月十七日印刷
昭和七年十月二十日發行
發行兼編輯印刷人 東京市芝區琴平町一 角田吉夫
不二屋ビル
發行所 日本山岳會報編輯所
（和交社印刷所）

スキー用具品揃

東京店開業小川町ビル二階（西口）

Schenk
Häsler
Jöerg
Hupfauf
東北帝大
（ニツケルクローム）

SKI
SKI SCHUHE
RUCKSACK

STEIGEISEN
SEILE
BERG SCHUHE

山とスキー具專門
好日山莊
大阪市北區堂ビル前大阪貯蓄三階
西岡一雄
東京市神田區小川町電停前小川町ビル二階
海野治良

日本山岳會圖書室文庫
圖書目錄(和書之部)第一輯

會報十九號附錄
昭和七年九月二十五日現在

著者	題名	發行年度
愛場 秋文	日本アルプス	昭二
天沼 俊一	埃及紀行	昭二
青木 純二	山の傳說	昭二
青木 文教	西藏遊記	大九
青木 恒三郎	萬國名所圖繪 I—VII	明三七
芦田 伊人	大日本地誌大系 卷一—卷九 卷十六—卷二十 卷二十二—卷三十	昭四
ジョン・バチエラー	アイヌ語より觀たる日本地名研究	昭四
別所 梅之助	石を積む	昭六
別所 梅之助	山のしづく	大一三
武俠世界	山河跋涉號	大八
文藝倶樂部增刊	旅之友	明三一
地球特別號	溫泉號	大一三
遲塚 金太郎	ふところ硯	明三九
遲塚 麗水	山水供養	大二
園藝之友臨時增刊(第二年十號)	高山植物	明三九
財團法人富士文庫	富士文庫第一卷	大一五
藤木 九三	岩登り術	大一四
藤木 九三	雪・岩・アルプス	昭五
藤木 九三	雲表	昭六
藤木 九三	槍穗高岩登り	昭六
藤木 九三	屋上登攀者	昭四
藤島 廣滿	富嶽紀行	明三三
藤田 信道	アルプス、ヒマラヤ處女峰登攀史	昭六
深才村役場	深才鄕土誌	昭四
福澤 桃介	槍ケ岳を中心として	大一三
福島山岳スキー倶樂部	吾妻、磐梯、五色、沼尻	昭六
福澤 諭吉譯	世界國盡 全五卷	明二
福澤 諭吉	改曆辨	明六
船田 三郎	岩登	昭五
船田 三郎	スキー登山	昭四
後藤 朝太郎	日本より支那へ	大七
濱田 青陵	希臘紀行	大七
花見 朔巳	大日本地誌大系 新編會津風土記 I—II	昭七
原田 光夫 松山 思水	日本探檢〔世界探檢全集〕	昭六
原田 光夫	日本アルプス	大一五
原口 亨	赤石白峰山脈縱橫記	大七
日野 强	伊梨紀行上卷 日記之部下卷 地誌之部	明四二
平賀 文男	日本南アルプス(上)	昭三
平賀 文男	南アルプスと其溪谷	昭六
廣田 戶七郎	スキージャムピンゲ	昭五
朋文堂	山の手帖	昭六
北海道帝國大學文武會スキー部	スキー術階梯	
北大スキー部	十五周年記念號	大一五
北大文武會スキー部	スキー術教程	昭七
本間 不二男	信濃中部地質誌	昭六
米國コーネル著	地形論	明一〇
帆足 義雄譯	全四卷	
中村 正直校	日本アルプス縱斷記	大六
一戶、河東 長谷川		
井田 清	山(詩集)	昭六
池田 悍	山へ溪谷へ	昭六
井野邊 茂雄	富士の歷史〔富士の研究I〕	昭三
井野邊 茂雄	富士の信仰〔富士の研究III〕	昭三
井上 雅二	中央亞細亞旅行記	明三六
井上 圓了	日本周遊奇談	明四四
石內 爲次郎	箱根八里	大二
石上 錄之助	登山必携山嶽めぐり	大一〇
石原 初太郎	富士の地理と地質〔富士の研究V〕	昭三
石井 勇義	高山植物觀察と栽培	昭五
石川 欣一	山へ入る日	昭四
石倉 重繼	日光名所圖	明三五
磯 清	隨筆吉佛曖語	昭二
一水會パンフレット第一輯	造園研究	昭六
板倉 勝宣	山と雪の日記二部	昭五
伊藤 愿譯	ヒマラヤに挑戰して	昭六
伊藤 秀五郎	風景を歩む(詩集)	昭三
伊藤 修	最北の日本へ(カムサツカ見聞記)	大一五
岩崎 重三	阿蘇山の地學的研究	明四〇
角田 政治		
有田 保太郎		
ジャパン・ツーリスト・ビユロー	旅程と費用概算	昭三
賀田 直治	臺灣中央山脈橫斷記	大三
科學畫報臨時增刊	山岳の驚異	昭六
科學畫報臨時增刊	昆蟲の驚異	昭六
各務 良幸	山岳大觀	昭六
麻生 武治		
改造社	日本地理大系 I—VII 別卷I—V	昭五
竹節 作太	新しいスキー術	昭五
カールヘンゼル著	マッターホ	昭五
書上 喜太郎譯	ルンを爭ふ	
加茂 季鷹	富士日記	文化二
冠松 次郎	立山群峰	昭四
冠松 次郎	黑部溪谷	昭三
冠松 次郎	剱谷	昭四
冠松 次郎	双六谷	昭五
冠松 次郎	後立山連峰	昭六
神奈川縣大箱根國立公園協會編	大箱根國立公園	昭五
加納 一郎	氷と雪	昭四
鹿子木 員信	ヒマラヤ行	大九
鹿子木 員信	アルペン行	大三
笠原 鐵太郎	中滿原郡山岳誌	昭四
香川 幹一	地形學入門	昭六
加藤 咄堂	旅から旅	大四
河田 楨	山に憩ふ	昭六
河田 楨	東京附近の山々	昭六
高畑 棟材	奥秩父と其附近	昭六
河田 楨	乘鞍嶽上十日記	大一〇
川口 孫治郎	西藏旅行記	明三七
河口 慧海	日本の山水	大四
河東 秉五郎	支那に遊びて	大九
河田 楨	一日二日山の旅	大三
近畿の登山研究會	近畿の登山	大一三
木下 糾	米國アルプス踏破記	昭六
金星堂	登山、キャンプ	昭六
岸田、矢部	富士の動物、植物	昭三
北川 淳一郎	四國アルプス	大一四
北川 淳一郎	山の話	昭二
小秋元 隆邦	最近のスキー術	昭五
小秋元 隆邦	銀盤に描く	昭五
小林 房太郎	火山	昭四
小泉 秀雄	大雪山	大一五
小島 烏水	浮世繪と風景畫	大五
小島 烏水	雲表	明四〇
小島烏水補修	富士山大觀	明四〇
小島 烏水	不二山	明三八
小島 烏水	不二山	明三九
小島 烏水	扇頭小景	明三四
小島 烏水	銀河	明三三
小島 烏水	山水美論	明四一
小島 烏水	山水無盡藏	明三九
小島 烏水	日本山水論	明三八
小島 烏水	氷河と萬年雪の山(限定特製版第四十八番)	昭七
小島 烏水	氷河と萬年雪の山	昭二
小島 烏水	木蘭舟	明三九
國府 犀東	不二一周	明四〇
國府、野村	南アルプスの雪に消えし實	昭五
克明會	追憶(中野克明氏追憶)	昭六
小松 榮	富士とアルプス	昭六
長野縣小諸尋常高等小學校		

淺間山　明四〇
小西　和　日本の高山植物明三九
小西　和　瀬戸内海論　明四四
河野　齢藏　高山研究　昭二
小山　博　山の犠牲附山嶽登攀心得　大五
窪田　空穂　日本アルプスへ　大五
熊澤正夫他四名　登山とキャムピンゲ　昭六
熊澤　正夫　上高地　昭五
黒田　正夫　登山術　昭七
黒田　初子　婦人の山とスキー　昭七
黒田正夫　黒田初子　山之素描　昭六
教育學術研究會(田中六藏)　靈峰富士　昭二
前田　曙山　高山植物叢書　第一卷　明四〇
槇　有恒　山行　大三
堀田　健三　キャンピンゲ　昭六
松原　岩五郎　日本名勝地誌　北海道　明三四
松井　幹雄　大菩薩連嶺　昭四
松川　二郎　山の民譚、海の民譚　昭二
松本　唯一　大阿蘇の新研究　昭七
松尾　秀一　武藏アルプス　昭六
松浦　厚　富士岳麓回湖記　大五
松山　棟菴譯　地學事始　全三卷　明三
三木　高岑　山岳征服　昭四
水野　祥太郎　山野スキー術教本　昭六
宮地、廣野　淺間神社の歴史　昭四
三好　富太郎　日本高山植物圖譜　明四二
牧野　大六
みづゑ山岳號

文部大臣官房體育課　アマチュアに關する規程集錄　昭七
向島　豊之助　飛騨探勝　大九
村井　弦齋　木曾の神秘境　大九
内務省衛生局　國立公園　昭二
長田　秋濤　ヒマラヤ山探險明三三
長田　進　實用スキー術　昭六
中島　吉太郎　傳說の上州　昭七
中村　秋季　ホイットネ征服記　昭六
中里　介山　千年樫の下にて　昭三
中澤　英夫編　山に眠る(中澤達夫氏追想錄)　昭五
新島　章男編　山のスケッチ　昭六
日本歴史地理學會編　箱根(歴史地理臨時號)　明四三
日本山岳會　山日記(昭五)
日本山岳會　山日記(昭六)
野村寅(遺稿)　みのる　昭五
野中　至　富士案内　明三四
納富　重雄　山の鍵　昭六
野崎　左文　日本名勝地誌　I—VIII—X　明三四—三八
小川　煙雨　東京郊外名所めぐり　大五
小菅　廣胖　大原　守治編　銀山平と尾瀬沼　大一四
大橋　乙雨　千山萬水　明三三
大橋　乙雨　續千山萬水　明三三
大泉　黒石　山と峡谷　昭六
岡　太仲　母故々路(岡一男氏追悼)　昭六
岡田　武松　氣象學講話　昭三
岡本　勇治　世界の名山大臺ケ原山　大三
岡村　利平　飛騨史料維新前後の一　昭二
大町　桂月　箱根山　大一

大町　桂月　富士行　大八
大町　桂月　山水大觀　大六
大前　繁義　山人　昭三
大中　德三郎　富士行者身祿之傳說　昭七
大島　亮吉　山、研究と隨想　昭五
太田　行藏　憧れのキャムピンゲ　昭六
太田　行藏　登山　昭四
大谷亮吉編著　伊能忠敬　大六
太田保一郎校補　西藏　明三七
西藏研究會編　紅葉　煙霞療養　明三七
尾崎　増刊　伊豆半島　大二
歴史地理　富士山號　大九
歴史地理　坂部　護郎　雪の王者シュナイダーは語る　昭五
坂戸勝巳　日本山岳文獻ノート　昭七
清水忠雄　セガンティニ　大一〇
佐久間　政一　櫻井　榮太郎　甲州案内　明三九
櫻井　史郎　山の遭難防遏方法　昭六
笹川　速雄　スキーインゲ　昭四
笹森　儀助　千島探檢　明三六
佐藤善治郎　森丑太郎　箱根大觀　明四三
靜觀道人　富岳志　明四一
晴林堂版　北海道の山岳　昭六
關露香　印度探檢　大二
關露香　中亞探檢　大一
志賀重昂　志賀重昂全集第一卷—第八卷　昭三
志賀重昂　地理講話　明三九
志賀重昂　日本風景論　明三五
志賀重昂　世界山水圖說　明四四
志賀重昂　續世界山水圖說　大五
志賀重昂　河及湖澤　明三一
重田定一　嚴島誌　明四四

島田定和　日本名勝地誌　XII　明三四
臺灣志村寛　前田次郎　志村鳥嶺　千山萬岳　明四〇
志村寛　高山植物採集及培養法(二部)　明四二
新光社編　日本アルプス　昭六
篠原良雄　昇仙峡詩文抄　明二
新小説　増刊　漫遊之友　明三三
史蹟名勝天然記念物保存協會　上高地天然記念物調査報告　昭三
白井光太郎　増訂日本博物學年表　明四一
小國民　富士山奇觀　明三三
スポーツ七月増刊　登山とキャムプ　昭六
菅沼達太郎　東京近郊の山と溪　昭六
菅沼達太郎　山岳服裝近代色　昭七
住友山岳會　近畿の山と谷　昭七
橋南谿子　東遊記　明三九
橋南谿子　西遊記　明三九
太陽　日本山水大觀　大二三
田島勝太郎　山行記　大二五
高木菊三郎　日本地圖測量小史　昭六
高橋次郎　アールベルゲ　昭四
高橋翠郊　誰にも出來るスキー術　昭四
高橋翠郊　スキー五十種　昭四
高畑棟材　山を行く　昭五
高頭式　日本山嶽志　明三九
高頭式編著　日本太陽暦年表上、下卷　大九—一〇
高頭義明　御國の咄し　大一四

高柳、澤田、柴田　富士の文學、美術、遺蹟　昭四
武田久吉　尾瀬と鬼怒沼　昭五
武田久吉　高山植物　大六
武田久吉　高山植物の話　大一三
武田久吉、小林義秀　富士山　昭六
竹内直馬　朝鮮金剛山探勝記　大三
田邊主計　エヴェレスト登山記　昭五
田部重治　日本アルプスと秩父巡禮　大一〇
田部重治　山と溪谷　昭五
田部重治　山と溪谷(普及版)　昭七
田部重治編　スキーの山旅　昭五
田部重治　峠と高原　昭六
田中阿歌麿　趣味の湖沼學　大一一
田中阿歌麿　日本アルプス湖沼の研究　昭五
田中薫　登山　昭四
田中六藏　靈峰富士　昭二
探檢世界　雪中富士登山號明四二
玉井紅葩　山河拾四州　明四五
田山花袋　日本名勝地誌　明三四
琉球帝大山の會　スキーの理論と技術　昭六
鐵道省　日本北アルプス　大一三
鐵道省　登山案内　昭三
鐵道省　キャンピンゲの仕方と其場所　大九
東亞倶樂部編　中華三千哩　明四二
東京地學協會　地學論叢　ヘディン號

(未完)